

# 城主の威容を示した 天守閣は市民の拠り所

# 広島城



毛利輝元は大坂城下の賑わいを見て、天正17年(1589)吉田郡山こおりやまから太田川河口に城下町をつくりました。五箇村の軟弱なデルタでの築城には、多くの杭を川端に打ち込み、補強して堤防を築く「千本杭」工法が用いられています。また、水中では腐りにくい松丸太を「胴木」として石垣の下や堀の底に埋め、天守台の盛土は何層にもわたって叩き固めた後、天守閣が築かれています。

その天守台の石垣の隅は算木積みでないことから毛利氏時代の石垣と言われ、またはカキなどの貝殻がついた石も見られることから、近隣の島だけでなく海岸からもかき集めたものと思われます。一方、二の丸の太鼓櫓の石垣は石垣の隅が崩れない様に角石を左右交互に振り分けて積み上げる算木積みになっていることから、慶長10年(1605)以降と考えられています。

明治4年(1871)に廃藩置県を迎えると、広島城は城としての役目を終え、一時期は県庁として使用されたものの、明治27年の日清戦争の開戦で大本営が広島城内の陸軍司令部に移されました。この時、城内の建物の多くが取り壊され、新たに陸軍の建物が建設されましたが、昭和6年(1931)に天守閣は国宝(現・重要文化財)に指定されています。しかし、昭和20年8月6日原子爆弾の投下により、爆心地から1kmの天守閣は門や櫓とともに崩れ落ち、石垣と堀だけがかつての姿を伝えていました。

昭和26年、広島国体に併催された体育文化博覧会で模擬天守が建設されたものの、終了後解体されました。2年後に城跡が国の史跡指定を受けると天守閣再建の機運は高まり、広島復興の現状、産業及び観光分野の実情を広く紹介することを目的に、広島復興大博覧会が計画され、鉄筋コンクリート製の天守閣の外観復元工事が始まりました。翌33年3月26日に天守閣が完成、博覧会終了後には広島城郷土館として開館し、現在に至っています。また平成6年(1994)には、原爆で焼失した二の丸の表御門・平櫓・多間櫓・太鼓櫓が、戦前の写真・図面や発掘調査の成果を元に、江戸時代の姿に復元されました。

一方、天守閣は外観復元から60数年を経て、耐震が危惧されるようになり、現在「広島城のあり方に関する懇談会」で市民の声も聞きながら木造での復元も含めて検討がなされています。

## ■位置図



戦前の広島城 (144907) 【広島市公文書館蔵】



隅が算木積みでないことから毛利氏時代の石垣と見られる広島城天守台



二の丸太鼓櫓の石垣の隅は江戸時代になって用いられた算木積みである



中秋の名月が寄り添う広島城